

珍說豹之卷

後篇

下

13

2940

6 止

9 170 1 2 3 4 5 6 7 8 9 180 1 2 3 4 5 6 7 8 9

門へ 13
2940
卷 6

斐

珠説豹文卷後編下

鼻山人著



○ 稍小色のほくある黒白の二枕

初ハぬぐとして破れ安く時ハぬぐとして安
安くとりやむ小滝也如紋女ハ大町終母が
美る兒等々小坊のれも一方あるは皆ありて
季が身清の斗様るのゆゑも湖へを流すか
まろく大なる方吉相の内通せんと一流際勢略

白巻後編下

昭和九年
七月九日
尾末

城巡らせしはのりせし幸鳥菊翁といふも
老不いふあを云會りて花畑村へ幸へせし不末
がるおのち稲妻光吉がぬ水業の死
あつるは神あぬ母の知つてて定めてそ
よく花畑村へいさうたうらさぬ若四季が移
季子燈文までもをきしつるとおのひの外せの
日小あれども菊翁の海らざるふハ世次の大
角あられて戻方角をたれーりア人のぬ

あぬ菊翁のいと精し事を操りていしがその
日の昏る菊翁のつよく来ぬるいめの菊翁
草右あといふあひのあつたじく証付と紋次不
告るあつた乳が糸の辻堂ふ赤鯉とされそ
菊子れあつる老あり村のそつ合とめてきりそ
死翁をあらたなりえれがえあつてのあつは方の所
家来菊翁のふ疑ひあつたがけもたすふ
行をたし〜あつてまふあつていさげられ〜

びきりあもか知らせやして申すは成りんと云ふ
 証付てまうのほこりては幕のあつてうと申す
 昏夜の分ちめあびりうません退落しから退利
 から夜盗かし目とんび板のる穂ぎと云ふ
 持神部も透もあるませぬ由領まきぬいぬ
 度由知入中ほしと二ふふ位と申すのあつて者
 きては髪を穿もゆき申すそれゆゑあはれ
 目ふきと横切を働き申す菊新ぶの成退

剥して給うて除くもの切うは奴あが仕業でござ
 申せうと申すは奴あが仕業でござ
 う掛れあはれ切あるは紙は他人あつて
 撥してのりての外の大なり申すト作敷あも又
 喋りてあつてあつてのもなぬさうそくあつて
 同なるあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 くるあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 ば紋あつてあつてあつてあつてあつてあつて

朝の供おまき着四季が母のこゝろまゝいそいそ
 押のへび記後をよむ行舟のころいそいそ
 お婿とて垂あまのぬその是あつていそいそ廓へ
 舟と着せあまのぬその是あつていそいそ廓へ
 治じりる小今胡をや遠の人の来りて着四
 季をばは道あつてふりてあまのぬその是あつて
 あればの季治文を治極とてあまのぬその是あつて
 きのせしと接程あまのぬその是あつてあまのぬその是あつて

是果てはあまのぬその是あつてあまのぬその是あつて
 よう知らしめ知もあまのぬその是あつてあまのぬその是あつて
 成程りさんとせしは舞忽の斗ひ一人の来り
 成程りさんとせしは舞忽の斗ひ一人の来り
 着四季が母のこゝろまゝいそいそ廓へ
 けうの朝母さあまのぬその是あつてあまのぬその是あつて
 是果てはあまのぬその是あつてあまのぬその是あつて
 今あまのぬその是あつてあまのぬその是あつて

源氏物語後編下

着るをやが海を立あそぶ母のが後歩ゆるさ
 面目もある兒々々の仕合せ一人の母「着四季が
 方の約束の知事さるるのをさぐらせんのさび不
 引くさざや教さふ沈むらんや不意ある
 仕合せと人ふ教さのくら目とせ世の慈も我
 らあつとらあつとら一國果ある業の躊躇八百あ
 の命のさあつとらあつとら一國果ある業の躊躇八百あ
 身よ不揃りるるのさあつとらあつとらあつとらあつとら

けらひかりくと昔を教さつとらあつとらあつとらあつとら
 角やとらあつとらあつとらあつとらあつとらあつとら
 まあつとらあつとらあつとらあつとらあつとらあつとら
 さあつとらあつとらあつとらあつとらあつとらあつとら
 響くだてと振うら知れさあつとらあつとらあつとらあつとら
 ぐる四方八方一時お昔あつとらあつとらあつとらあつとら
 命のさあつとらあつとらあつとらあつとらあつとらあつとら
 あの影と昔くれが母のさあつとらあつとらあつとらあつとら

春の巻 後編 六

伏せ給ひ申すまゝに御業の死もまゝ一人の
 娘が可成りさとのん程お絆されておつらさじ
 今こそ入るままである存令しらせめて娘が母の
 ありしきつて死ななふと私を思ひ人の縁の世
 の業理も捨てて子ゆふ違ふ母の親り言もて血の
 涙とのちまふさふさくつとマノ親母さぬのまじく
 お憂ふ不辨じを清のかきかぬらまじく娘
 より母が百倍子倍のまじくもむらぬ母の業縁是

も備へ不天所さぬのお情一とあり難く母の
 甲斐もあく調練の子解る神たぬとあま茶
 世の業あもせまはす別は後娘のあも娘茂
 後々のさぬあも能耳せせともさうはしこも
 今も却ておのひのたの菊菊とのをさるあれ
 死お中かてか入る娘がぬのう入おおもあれず
 ありさるさくまもやまもがういひむもがうもあま
 空よのるまはしおのひはまじいとおのくはまじい



滝野屋紋女

兵左衛門の女

三
政信画
信

巻五下



紋女が女

巻五下

又^{つゝ}一^つつ^つの^つ成^つ也^つの^つま^つす^つの^つさ^つら^つの^つあ^つの^つあ^つの
 母^つの^つあ^つの^つま^つす^つの^つあ^つの^つま^つす^つの^つあ^つの^つま^つす^つの^つあ^つの^つま^つす^つ
 兄^つの^つあ^つの^つま^つす^つの^つあ^つの^つま^つす^つの^つあ^つの^つま^つす^つの^つあ^つの^つま^つす^つ
 面^つ目^つあ^つく^つは^つう^つの^つあ^つの^つま^つす^つの^つあ^つの^つま^つす^つの^つあ^つの^つま^つす^つ
 摺^つ一^つ也^つと^つを^つ矣^つと^つを^つ矣^つと^つを^つ矣^つと^つを^つ矣^つと^つを^つ矣^つと^つを^つ矣^つ
 母^つの^つあ^つの^つま^つす^つの^つあ^つの^つま^つす^つの^つあ^つの^つま^つす^つの^つあ^つの^つま^つす^つ
 又^つ一^つ而^つ不^つ能^つある^つ盗^つ賊^つの^つ者^つ也^つなり^つとも^つも^つ乳^つ母^つ
 成^つ佛^つ伽^つ也^つと^つを^つ矣^つと^つを^つ矣^つと^つを^つ矣^つと^つを^つ矣^つと^つを^つ矣^つと^つを^つ矣^つ

う^つの^つあ^つの^つま^つす^つの^つあ^つの^つま^つす^つの^つあ^つの^つま^つす^つの^つあ^つの^つま^つす^つ
 う^つの^つあ^つの^つま^つす^つの^つあ^つの^つま^つす^つの^つあ^つの^つま^つす^つの^つあ^つの^つま^つす^つ
 疾^つも^つ搜^つぎ^つん^つの^つあ^つの^つま^つす^つの^つあ^つの^つま^つす^つの^つあ^つの^つま^つす^つ
 配^つと^つを^つ矣^つと^つを^つ矣^つと^つを^つ矣^つと^つを^つ矣^つと^つを^つ矣^つと^つを^つ矣^つ
 成^つ佛^つ伽^つ也^つと^つを^つ矣^つと^つを^つ矣^つと^つを^つ矣^つと^つを^つ矣^つと^つを^つ矣^つと^つを^つ矣^つ
 今^つの^つあ^つの^つま^つす^つの^つあ^つの^つま^つす^つの^つあ^つの^つま^つす^つの^つあ^つの^つま^つす^つ
 尋^つね^つら^つの^つあ^つの^つま^つす^つの^つあ^つの^つま^つす^つの^つあ^つの^つま^つす^つの^つあ^つの^つま^つす^つ
 死^つを^つ矣^つと^つを^つ矣^つと^つを^つ矣^つと^つを^つ矣^つと^つを^つ矣^つと^つを^つ矣^つと^つを^つ矣^つ

今も名うとの懸賞とありけるよ〜粗村人の嘆ふ
 されば着やりの〜との菊を彩せ〜の着四季か
 らを大集ひら〜もび曲りのあはるるしう吉竹忠
 が〜れりあるは究めては帰近きお花定せりト是
 よりちららもや落とありて〜る乳母まぬおも歌と
 吉く〜着四季が〜のありあをともお尋ねりてふら
 世の中の〜たもほ〜も思ふ〜が〜のひあ〜と人や
 っら〜ん供も着四季ハ又〜て滝神を後々ト約座

されば〜の季後文哉後極と〜と持〜と〜と人
 の老を何疑ふ〜もあ〜で〜人まぬ入もま
 までの大母を謝〜備書ののひも〜と〜と
 して〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 よう〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 やん〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 ま〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
 実〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

ゆく程ふまや帰れ家近くつらうればかサリ
 押らんまうら親方の別業入のモウるがあら
 歩ひてゆく清純をせよりらうト着四季を駕
 ありかきのおつる五分の酒み成きそ何まな
 是より移入海へくる着四季の何とまへくすま味
 幾も人まといのいづのまへふたうら方よりの
 運ひと押のいづも重さうアの雪を備分て
 白妙の細る傳ひあを小楢ふあ一のい家る

付てのふまいずりあれは傳る人里ぬれしあ
 ねんまがままひのいづとらうらぬれひ
 案月おは流し入うえれがらまの乱振るま
 むくはひれ荒男羅漢も若の昇徒死編
 種右肩の茶碗酒着四季子が次女をるるひヤア
 するふゆのくし着茶碗の福ぬさてもうらな
 戈天ト哲くく感てふお持茶碗の湯の書
 も知らずえとれてあうらう光吉もその婢娘

抑のいぬ不端も縁あらきまらるるがあら約まづく
あきらと清めてはけ可家へ嫁入りの危聲きぬりまの
あきら先吉身分ハまんと物入ても擔玉が大船おそく
あきら男振へふ豆も金銀も自内に入らせぬまや
あきら抑のいぬ不端も縁あらきまらるるがあら約まづく
あきら婦のゆかりのさうばきも茶碗で財のるり合せる
あきら物入す身法子をかき着四季のものをまひる
あきら六盗賊の拙意もくまを退ばぬ谷まひしもの

災難こそあつたれ虎の口へ遁れても竜の蹄の
あきらら死抑のいれ身を賜る神さぬや仏さぬもあり
あきらやうらやても苦界不捨く世のくくぶ潔めあり
あきら身の果へく子て覚悟のうた勉め鬼下口ふかぬ
あきら且ても何の命の惜とませうき切を親の死不問
あきらふさくまきで別道へ孝みのの子ま入捨よるる
あきらくら荒れ神のおるまきも様せしものあれが
あきらあけく今目系あとの罪の醒めく係るしつちかぬ

春あひはれて来りしつらよく〜拙あはれものふ
運後うお母のふ母さぬも母さん〜さら海やさぞ
ゆくのゑの知れぬを忠人て歎き死あもあはれませ
我多神うを苦勞あ〜と又さぬも又母さぬもさる
あひ死あやうあはれていふ孝の擧のきひ〜未
事あ〜は次あぢいせぬあぢいを母分て度うひ
世界ふらうら〜ふお女中さんい裁あもあつらう
親もあは菫あはれも世るあぢいづの契情優

身廓育ちの我修めのぢあでおんふ叶いぬへ
あれてある人ぢよめ死のうまひ花も後えをう
の對〜ものあ〜立花挿入の救あ〜ぬ
あ〜はせせあ〜あ〜のお情あ〜のあ〜と捨て
おさあ〜んのお悔〜あ〜は〜もあ〜死由陰徳下徳
る決の昇〜あ〜雨を母なる梨子の花最慈れ
あ〜るふら〜る光吉ハ嘲らあ〜いヤ〜のあ〜るあ〜調
張〜い〜種ハ契情のあ〜あ〜あ〜慈あ〜んや情

んがあつてまらけはめまゝあるのり人の歎きや
 せしむるやアアとてめえぬあり知らぬ故法使より
 えんきくろく よき 富のれせく外まる妻の申めつとふ
 兄徳で笑つて富のれせく外まる妻の申めつとふ
 んのゆるきれぬト相違論不吹揚師面己もまん
 さら後ららの盗賊でもおんせぬ親ハ何の何某ト
 しまゝなるした天下の田農丈十八の時伯母まゝふ
 勤事さうれて花畑村を承てまゝ一それうらうら
 ぼく音書まゝぐら世菊のまゝひらち宮戸川の

湯場をで状書ていしよを拵もちこまし解きの侍さむらいがあらふ令し
 目とをいふ不知しうく妻かみの喧けん覚きを仕しを根ね籍せき
 めのヨよみ付つぞトト噪そ動どうののせせくくぬぬトト奈な業ごうひひやや
 その状書然じやうじよからまませせくくああつつららトト明あててををれれをを
 小判こばんでで丁ていどどみみ千ちああととれれがが海うみ村むらののええををトトぬぬてて今いまもも
 盗賊とうぞくのの親おや方かた持もちままささんんががなな妻かみ活いつつととぬぬてて着き四よ季き
 狗いぬ不ふ解かい 耳みみととららややたたららふふ昔むかし父ちちささぬぬととれれいいふふととああそそ
 昔むかしままでで昔むかし界かゝい不ふ解かい 仇あだ敵かたみままととんんののううちちああ

ねりともおどく 色いろの形かたちは進すすまが却かえつてうた目めの
 上うへ望のぞせんとほくほくとうんめん 揺ゆるゝとすひか 延のびれが翠あざ
のび 延のびる 歌うた 漸なまにほのほと親おん念ねんありとままあつたの
あつ 延のびれと人の形かたち忘れぬものへおどろかせぬまゝ
 傾かたむ埒らの舟ふねのうへまゝの人の形かたち忘れぬまゝ結むすぶる縁えん
 もと縁えんはうへまゝもまゝの人の形かたち忘れぬまゝに可かきも
 うへの舟ふねの形かたち忘れぬまゝの人の形かたち忘れぬまゝに可かきも
 埒らの舟ふねの形かたち忘れぬまゝの人の形かたち忘れぬまゝに可かきも

くらせり〜 厚あつひか情なさけの舟ふねの形かたち忘れぬまゝに可かきも
 たちまち蕩たふ惑まどとあり〜 その舟ふねの形かたち忘れぬまゝに可かきも
 きておとすればはは 懸かへとてあつた湯ゆるやんあつた
 サア〜 幸さいひは空そらとものあひ傍そばありてあつた
 偶ぐの夕ゆふの食けあつたまのぬの中なかト自みづか界かいのトと人ひと
 なるつ引ひ延のび〜と目めの舟ふねの形かたち忘れぬまゝに可かきも
 心こころ程ほど也なり事ことすす先ま吉きちが徳い不ふをよせそ

此の如くも父の如くも果てたてし頃の如く
 目立ぬ思の中死にふちも憂ぬ思のせめて
 心小精をのしりまをさうへの憂分て誓うて
 ちまらせ四十九日の中魂睡さるる夜の標を
 弱れぬとお誓ひます一遍の念仏もよの世の
 別世の暇ひの身候ふさせしうすまます
 何ぞやの安情でも美理と情を知つて居り
 ますと夫もあれがあらるがうた世の茶人の通る

ト夢て見吉ホク〜 幾時きりともおや居理が
 夫もあれがあらるがうた世を成りやうと
 魔々〜も曲があらるんあら思の明まごん
 おとほくちて待て中る是うら日教へモウ候ふぞ
 サアゴらう十日う十一日〜それあれが君安ひと
 まづそのうちか容さぬ水て安れハ鈴〜ませぬ
 ト家おかくまの憂思の世を欺く着四季が
 んのうちの世〜さばらう筆を放れ〜その又

龍りゆう入いりつるらた押おのひ今いまハ善界ぜんがいハ百倍ひゃくばいの
 まさるまさる雜美ざんぎの絶たつ命めい湯たうの影かげを影かげて一ひと
 ふ乱らん天地てんちの神かみ不ふ振しんをうけ敷あききあつるあの
 うち不ふ戦せんをすくねたすくびもとらで泣なてなままぶ
 我わがの命いのちを神かみもああるあ下したおおがが一ひと七しち日にちふ
 満まんその日ひ的てきつと光くわう吉きち下したの者ものをしはは見みえ
 然しかるる山さんの鬼おに物ものとはるる一ひと日にちふ立た出でるる湯たうの影かげハ善ぜん四季しき
 只ただ独ひとりのひ湯たうふあを逐おとと経きんの口くちを逐おととんんと

身みたたるるも方角ほうかくの知ちれぬ者もの一ひと日にちふふ押おのひ今いまハ善界ぜんがいハ百倍ひゃくばいの
 満まんその日ひ的てきつと光くわう吉きち下したの者ものをしはは見みえ
 然しかるる山さんの鬼おに物ものとはるる一ひと日にちふ立た出でるる湯たうの影かげハ善ぜん四季しき
 只ただ独ひとりのひ湯たうふあを逐おとと経きんの口くちを逐おととんんと

卷後編下

水ひ尋ね不出てのうら若き男也ぐく勿申るる
 か月ふまはつては方の中すすめいやは是まで来たる
 道引しつひ妻の足もまどひ却つてお好魔ト申
 途うち別まて強入戻りしめらるる盗賊のすま家
 あれがあらくおまきもくおのひつひも無理をぐず
 へいも母さぬいざあしてはあふ帯るもの成知なくみち
 引あひしりさてもお測のりありトおし解るく物
 の中是も文法信んせし非くさぬの成ちんトいさあ

の中すすあぬぐくと夢入もれを夢ひひの落しほくれを
 ぐく多しとこれあむら宛責の能智謀をあらが
 明日那のどくく不申すも秘らさけはあし止
 急ぐ我け安もて思ひあうおんおが難きもの秘し
 ぐく不し悟られあむらトあは津針をあらし合もて
 四季がんの中あむらと申しお教のりいしおあしこのも
 候まあれど先吉が戻りの程ききらぐれがせん方
 あくが別れの涙もあひぬトやく戻り盗賊ともの

る美し後編下

十一



東里山人戲作

叢川政信画畧

○傾城腹之巻

全六巻

江戸の山中屋の女勝山が傳中とよむとあるは家
物語あり家傳とよむも思ふ所迫つての真撰をせむ
るの實事婦人の鑑とあるは實情の後の巻出版の
きざしは高橋のくんとよむしくは判別し
當丁亥初冬より賣出ゆゆの 板元

和合人

二編 三編

瀧亭鯉丈作

大藏永常著 田家茶話

全五冊

近江守の
後編

志が字了意

後編

松亭金水作
貞齋泉晁画

江戸書林

小傳馬町三丁目

丁子屋平兵衛

